

## 愛知大学創立者

# 本間喜一：甥と母に宛てた手紙

— 1946(昭和21)年9月20日【愛知大学創立直前】 —

2009(平成21)年10月、本間喜一名誉学長の生家である山形県東置賜郡川西町玉庭にて、貴重な資料が発見されました。愛知大学設立直前の1946(昭和21)年9月20日に、本間喜一が甥の小池信哉、実母のくに宛に送った手紙です。(※手紙の主な記述は「(太字)」)

「この夏は近来なき多忙にて疲れ申候、五月以来同文書院大学に代る大学を設立し、学生教授達を救済致し度く」

戦時下の上海において東亜同文書院大学(以下、「書院」)最後の学長として、閉校に向けた苦労の後上海から帰国し、さらに戦後の厳しい環境のなか、新たな大学設立に向け多忙極まりない現実が読み取れます。そして、書院ほか海外から引き揚げてきた教職員・学生への救済の思いが記載されています。これは、同僚や学生、ひいては国家への愛情の表れです。



「募金に都合悪しく、容易なものに無之(これなく)候」

愛知大学創設の地、豊橋市やその他地域の人達からの寄附に対して感謝の意が表されています。そして戦後のインフレ収束措置策などの影響により、親戚筋にあたる林毅陸(元慶応義塾大学総長・愛知大学初代学長)と共に慶応の三田会を頼って募金集めへ奔走し、「近来なき多忙にて疲れ」と記されています。

「(今年)十月開校 来年四月法経学部、そして文学部、農学部、水産専門部を設置致し度く」  
「将来大陸に志す者の中心人物を養成致し度く存じ候」

東三河地方(愛知県東部)は農産物の生産や水産物の加工に適しており、この地であれば教育面で大きな貢献ができると期待し、6大都市以外の豊橋を創設の地とした証といえます。

「米は一升八十五円」「只今は粉の配給、さつま薯の配給あり助かり」「六月はほんとに餓死に近きもの」「小生は十四貫五百匁(約54kg)と相成約四貫五百匁(約17kg)も体重減少」

当時の経済・食糧事情について記載されています。「世界の食糧事情改善されねば、昔の安い米も小麦も輸入し得べく、都市生活者は、本年の様な愚な事許り繰り返す事有之(これある)まじくと存じ申し候」と、農業や経済政策についての意見も述べています。そして愛知大学設立に向けた強い決意で結んでいます。



「いくら世は末世とは云え、結局道義に依って立つ事が大切に候。最後に幸福を来すものは利己に非ず、道義と確信仕候。小生の此度の大学設立の如き若し成功するとすれば、決して金やなんかの御蔭に非ず、専ら小生五十年は清貧に甘んじ正義の道を進んで来た跡を認められた結果と存じ申し候。目先の小さな利益許り追かける者の到底なし遂げ得る所に無之候」